

<Daniel De-Foe>としての *Robinson Crusoe*

——<de->と<con->の戯れ——

荒木正純

<作品>の概念がもはや崩壊している今日、<テキスト>はどこから読み始め、どこで読み終えることになるのか。<作品>の概念がわれわれの思考を完全に支配していたその昔には、<作品>は第1ページの第1の語から始まり、最後のページの<終り>(Finis)の記号の一つ前の語で終わっていた。文字通りに最後のピリオドが<作品>の<終止符>であった。そして、本の<タイトル>はその読み終えられた<作品>の<名>であり、<作者>(author)の<名>はその<作品>の<起源>(origin)で、それ故に<作品>を<正当化>(authenticate)するものであった。しかし、<作品>の概念が風化し、そのために<作者>の概念が活動停止となった今日、<作品>の、ではなく、<テキスト>の<時間>もしくは<空間>が問われなくてはならない。

結論的に言えば、<テキスト>はまず<空間>として存在する。<テキスト>の<起源>(the genesis)はなく、<テキスト>の<終末>(the apocalypse)もないからである。<テキスト>はカイロスの時間概念の空間化されたものではなく、つまり<起源>と<終末>に閉鎖された空間ではなく、他の<テキスト>群へと<différance>の原理に基づきながら、限りなく延長もしくは膨脹している空間である。たとえば、他の文学的テキスト、現実的テキスト、歴史的テキスト、そして宇宙的テキストへと拡散していく一つの、あるいは何らかのエネルギー空間として存在する以外にない。<時間>は<différance>の過程の中で生じてくるであろう。

たとえば、<Daniel Defoe>の記号と<Robinson Crusoe>という記号の関係、及びその両方を含む<テキスト>との関係を考えてみよう。この<テキスト>空間を読むとは、これらの二つの記号をも読むことを前提としている。*Robinson Crusoe*とは、以下のテキストのメトニミーに他ならない——<THE

LIFE AND STRANGE SURPRIZING ADVENTURES OF ROBINSON CRUSOE, OF YORK, MARINER: *Who lived Eight and Twenty Years, all alone in an un-inhabited Island on the Coast of AMERICA, near the Mouth of the Great River of OROONOUQUE; Having been cast on Shore by Shipwreck, wherein all the Men perished but himself. WITH An Account how he was at last as strangely deliver'd by PYRATES. Written by Himself.*> これはいわゆる梗概 (argument) のテキストである。とすれば、いわゆる<メタ・テキスト>の位置にあり、<序>にもなっている。そして、ヴァージニア・ウルフの言った意味とは別の意味で、<ダニエル・デフォーの名はタイトル・ページに現われる権利はな>¹⁾かったのである。その不在であった記号<Daniel Defoe>が上のタイトルに付加されて今日テキストを構成してしまっているのである。つまり、<作者>の名を要請した、<作品>の概念を育んだエトスが、<Daniel Defoe>を付加したにせよ、<付加>の意味は認めなくてはならない。その記号は、付加される以前のテキストに対するメタ・テキストとなっているのである。<Daniel Defoe>の読みが、物語テキストに適応されることが要請されている、もしくはそうする可能性がありうるのである。

記号<Daniel Defoe>は、このように *Robinson Crusoe* の物語テキストと同時に、その記号を自己の存在の<名>としていた人物のテキストをも指示している。たとえば、そのテキストの代表として次のものを設定してみる。

Defoe, Daniel 1660-1731. Daniel Defoe was born in the year of the Restoration, the son of James Foe of Stoke Newington, then just north of London. James Foe was either a tallow chandler or a butcher and there was no 'de' in his name; his son started calling himself Defoe about 1703. Daniel was intended for the ministry and educated at the Stoke Newington Academy, a Dissenters' school; but he rejected the intention of his parents and, until his marriage to Mary Tuffley in 1683, travelled in Europe in various jobs to do with trade. At the time of his marriage he was a hosiery merchant in Cornhill. Defoe took part in Monmouth's rebellion in 1685 but seems not to have suffered for it; he became a committed supporter of William of Orange (William III) and joined his

army in 1688.²⁾

このテキストの読み方は、たとえば次にあげる<foe>のテキストと同じ、いわゆる辞書的読みが要請されている。<Daniel Defoe>は、辞書項目であり、他の記号連鎖はその<意味作用>のテキストと位置づけることが可能である。

foe n. (poet. or rhet.) Enemy, adversary, opponent, ill-wisher;
 ~' **man**, (arch. or literary) enemy in war (lit. or fig.).³⁾

われわれは<Daniel Defoe>のテキストとこの<foe>のテキストにテキスト相関性を指摘することができる。<Daniel Defoe>のテキストによれば、<Defoe>は<de->と<foe>もしくは<Foe>とから成立していることがわかる。そして<Restoration>の記号は<restaurare> (re- 再び+ *staurare* 丈夫にする)を語源にしているから、当然<破壊>を前提としている。また、<王政復古>においては、Cromwellの政治は<foe>と定位されていた。<Stoke>を<stoke>とずらせば、それは<(火を)かき立てる>を意味作用し、比喩的に<(憎悪などを)かき立てる>ともなる。<Dissenter>にととの<foe>とは<the Church of England>であったし、<dissent>の<分離>の対象は<foe>でなくてはならない。同様に<reject>についてもいえる。<he>にととの<reject>の対象は、<the intention of his parents>で、これは<he>にととの<foe>となる。更に<rebellion><army>は<war>を前提とし、そこには<foe>が想定されなくてはならない。<take part in>や<committed supporter>は逆説的に<foe>を想定している。

<foe>に付加された<de->の意味作用は以下のテキストに示されているが、それは<Daniel Defoe>のテキストにまた適用しうるものである。

de- *pref.* meaning (1) down (*depend, descend*), away (*defend, deduct*), removal (*decapitate*), completely (*declare, denude*), in a bad sense (*deceive, defame, deride*); (2) [*thr.* OF *des-* f. L *dis-*] removal or reversal, forming compd. vbs. (w. derivs.) from vbs. (*de-acidify, decentralize, decentralization, de-escalate, demoralize, demoralization, depressurize, desegregate*) and ns. (*defuse, dehorn, de-ice, delouse, detrain*).⁴⁾

この意味作用を〈Daniel Defoe〉のテキストに適用すると、次の記号が〈de-〉と関係していることがわかる。〈Daniel〉をアナグラム化してみると〈denial〉となり、ここに〈de-〉が見てとれよう。そして〈De-foe〉。〈born〉とは子が母胎から〈de-〉することであろう。〈(north) of〉は〈de-〉の意味である。〈restoration〉にまつわる運動は、〈破壊〉もしくは敵対的状况から〈de-〉すること、〈removal〉〈reversal〉である。〈start〉はある地点からの〈de-〉。〈intention〉は〈in- (へ)〉と〈tendere 伸ばす〉を含むが、ある地点からの〈de-〉を前提としている。同じことは、〈educate〉にもいえる。〈educatus〉は〈é- 外へ〉と〈ducere 持ってくる〉を含み〈能力を持ち出す〉ことを原義とするからである。〈dissenter〉には〈dis-〉という〈de-〉の変形がある。〈rejection〉は〈removal/reversal〉に類した動きをその意味作用としているといえる。〈part〉を動詞にずらせば〈de-〉が読みとれる。〈take part in〉〈commit〉〈support〉〈join〉は〈de-〉の逆の〈con-〉の意味作用をしている。この〈con-〉は、更に〈marriage to〉にも読みとれる。

このように読んでくると、〈Daniel Defoe〉とは〈foe から de- する Daniel〉と読みうることになる。あるいは〈foe から de- することを denial する〉。もしくは単に〈foe の denial〉。後の二つはわかるとして、初めの読みの〈Daniel〉とは一体何か。一般に容易に連想されるのは次のテキストが表わすことではないか。

Dan'iel (dān'yēl). A Hebrew prophet captive in Babylon who, according to Old Testament book of *Daniel*, interpreted dreams of Nebuchadnezzar and handwriting on the wall for Belshazzar, and who was delivered by God from the lions into whose den he had been thrown for refusing to obey a decree of Darius.⁵⁾

このテキストに〈foe から de- する Daniel〉を読むことは、困難ではない。〈捕えられた〉(captive) Danielにとって敵(foe)とは、Nebuchadnezzar, Belshazzar, Darius. 更に、〈lions〉もそうである(Robinson と Xury は Lionらしい猛獣〈a monstrous, huge and furious Beast〉に出会う。そして Robinson と Friday は〈Wolf〉の群に襲われる)。そうした〈foe〉から〈deliver〉(*deliberare* (de- 離れて + *liberare* 自由にする・ある状態を解き

自由にする))したのは、<God>である。このテキストを<de->と<con->の用語で読んでみると、<Hebrew>の語源<ibhri>は<one from across (the river)> (Robinson Crusoe は<the Sea>を<cross>する人)で、ここに<de->の姿が見れる。<prophet>は<pro- 前に + -phemi 話す + -tes 人- 予言者>を語源とし (Robinson Crusoe は<~することになる>という言語表現を使用する。彼には彼の体験が<現前>しているのである)、したがって話される事柄から<de->している状態が暗示されている。あるいは、予言される事柄にすでに現前しているという考えから、<con->を読んでもよい。<according>にある<ac->は<con->と同じ意味作用をする。<deliver>はすでに述べた。<refuse>には意味的に<de->が読めるが、語源的にも可能である。明確な定立を辞典はしていないが、<recusare>が語源らしく、これは<recusant>と関係し、それは<recusare>を語源としている。この<re->は<反対> <離れて、去って、下って> <否定>などの意味作用を持ち、<de->に重なっている。また<obey>は<ob- へ + audire 聞く>から、<con->が、<decree>には<de->が見られる。ついでながら、<Daniel>を<denial>とアナグラム化したのが、ヘブライ語では<The Lord is God>の意味作用をすることを忘すれないでおう。後に見る、*Robinson Crusoe*のテキストと連鎖していくからである。

われわれはこの<Daniel>のテキストに、<分離>(de-)と<統合>(con-)の対立の運動を読んだが、もう一つの対立に注目しておく。それは<prophet (pro- 前に + -phemi 話す + -tes 人)><deliver><obey (ob- へ + audire 聴く)>が前提とする<声>、<book><handwriting>が前提とする<文字>の対立である。この対立は、その<分離>を<固定>化してはならず、<interpret (inter- 間に + pritium 価 + -ari)>において<融合>している。そして<inter- (間)>の存在として Daniel がいるわけである (Robinson Crusoe は自己の体験の解釈者である)。つまり、Daniel は<神>でもなく、<王>でもない。別ないい方をすれば、Daniel の<解釈>は<神の声>でもなければ<文字>でもない。しかもそれぞれの再現である。つまり、二つが Daniel の<解釈>によって<結合>させられているのである。<Daniel>は<The Lord is God>の意味作用をしたが、この意味作用自体に潜む<解釈>による<Lord><God>の<結合>に連鎖している。

壁に書かれた文字を解説する Daniel の挿話のテキストは興味深い (Robinson Crusoe は浜辺の足跡を解説する)。Belshazzar に解説を依頼され、

Daniel は次のように父 Nebuchdnezzar の神への態度から語りはじめる (Robinson も父から語り始める)。

... My lord king, the Most High God gave your father Nebuchdnezzar a kingdom and power and glory and majesty; and, because of this power which he gave him, all peoples and nations of every language trembled before him and were afraid. He put to death whom he would and spared whom he would, he promoted them at will and at will degraded them. But, when he became haughty, stubborn and presumptuous, he was deposed from his royal throne and his glory was taken from him. He was banished from the society of men, his mind became like that of a beast, he had to live with the wild asses and to eat grass like oxen, and his body was drenched with the dew of heaven, until he came to know that the Most High God is sovereign over the kingdom of men and sets up over it whom he will. But you, his son Belshazzar, did not humble your heart, although you knew all this. You have set yourself up against the Lord of heaven. The vessels of his temple have been brought to your table; and you, your nobles, your concubines, and your courtesans have drunk from them. You have praised the gods of silver and gold, of bronze and iron, of wood and stone, which neither see nor hear nor know, and you have not given glory to God, in whose charge is your very breath and in whose hands are all your ways. This is why that hand was sent from his very presence and why it wrote this inscription.⁶⁾

このテキストと *Robinson Crusoe* のテキスト相関性についての詳細な指摘は省き、今注目しておきたいことは、<現前> (his very presence/will) からの<離脱> (de-) と<統合> (con-) の運動である。Nebuchdnezzar は the Most High God に<a kingdom/power/glory/majesty>を与えられ<con->の状態にあったが、自らを<God>に似せて、<the Most High God>から<de->したために、その<his royal throne/his glory>から<de->された (depose)。<the society of men>から<de->され、<wil-

derness> に <con-> させられた。それによって、<the Most High God> の <支配力> を <知る> ことになり、<con-> の状態に戻る。Belshazzar も父の例を <知> (<con->) りつつも、<the Lord of heaven> から <de-> (against) し、<gods> へ <con-> している。そのために、<God> から (<de->)、<hand> が送られてきたという。これは、Nebuchdnezzar の <con-> と <de-> の運動の反復であるが、<hand/writing> というものは <de-> の典型であり、<presence/know/will> は <con-> の典型である。そして <声> は <神> に <現前> する故に <con->、<文字> は <神> から <不在> する故に <de-> と考えることができよう。この <不在> と <現前> の <中間> 存在として、<解釈者> があり、それが Daniel という次第である。

これまで読んできた <Daniel De-foe> の記号の意味作用はほぼそのまま *Robinson Crusoe* の物語テキストに持ち込むことができる。Defoe が、父の家名 Foe に <de-> を <con-> したのは、いかなる理由であったのか。これは想像の域を出ない。<貴族的な外観を自分に与えるため>⁷⁾ という読みは、余りにも浅薄すぎるであろう。われわれは以下のような伝記的テキストを持っているからである。Defoe が自らに <de-> をつけたしたのは1703年頃らしい。ほぼ43歳の頃である。その頃、彼は *The True Born Englishman* (1701), *The Shortest Way with the Dissenters* (1072), *Hymn to the Pillory* (1703) を出版し、1704年には *The Review* が発刊されはじめた。最初のものは、<イギリスにはオランダ人の王は合わない>と主張した人に対し、ウィリアムⅢ世を擁護した諷刺詩⁸⁾ で、この中で Defoe は <生粋のイギリス人などというものはありません>として、次のように述べている——‘We have been Europe’s sink, the jakes where she Voids all her offal outcast progeny.’⁹⁾ この発想はたとえレトリカルなものとはいえ、<イギリス人> vs. <ヨーロッパ人> という固定した対立関係を deconstruct するものであり、<生粋純血主義>の脱神話化をしていると読むことができる。この詩は成功したようであるが、次の *The Shortest Way with the Dessenters* では政治的力学をとらえそこねたようで投獄される。この諷刺はパンフレット形式で、一人の非英国国教会徒の High Church への攻撃である。ここから投獄へ至るいきさつは以下のテキストから知れる。

... the author played the character of a High-Church Tory and the ironic conclusion was that the shortest—and best—way was extermi-

nation. Unfortunately his timing was wrong; Whigs and Tories were engaged on the question of the succession (none of Queen Anne's children had survived) and Defoe brought down the wrath of both parties on his head. The Tories were in power and Defoe was fined, imprisoned, and exposed in the pillory. He became a popular hero, however, and was released through the intervention of the moderate Earl of Oxford, Robert Harley, who became his employer. While in prison Defoe wrote his *Hymn to the Pillory* (1703).¹⁰⁾

こうした背景があって、Daniel Foe は <de-> を自らに与えたとするなら、何らかの彼の意志をそのことで表明し、決して<生涯にわたって、称号、財産、地位を夢みていた>¹¹⁾ から付したのではないと読むことができよう。

確かに、Defoe の政治的活動を眺めてみると、節操のなさが感じられよう。Defoe を<foe>から、つまり<prison>と<pillory> (ライオンのほら穴 (den) に封じ込められた Daniel が想定される) とから救出してくれたのは Robert Harley であったが、ここに Daniel を<deliver>した<神>との関係を読むことは困難ではない。ちなみに、<Robinson>の<Robin>とは、<Robert>の別称であり、<Robert>に<-in>がついたものである。この Robert Harley の手先として、Defoe はスコットランドで地下活動をし(de-), 1707年に連合が成立した。しかし、the Tories が the Whigs に排除され、権力の移動 (de-) が起ると、Defoe は the Whigs に忠誠を尽す。更に、1712年までにまた権力の移動が起ると、彼の忠誠も動揺するという次第である。この無節操こそ、まさしく Foe が<de->を身におびたことの意味作用なのではないか。Defoe にとって、<自己>をとりまく全てが<foe>と定位され、そこから<離脱>、もしくはそれを<否定>することが Defoe の<生>であった、とは読めないか。<allegiance> (al- AD- + ligeance) と見えるものは、実に戦略的レトリックであった。<自己>を守るためのレトリックであった。したがって、この読みからすれば、<生涯にわたって、称号、財産、地位を夢みていた>という表現は、そのレトリックの記述をしていることになる。つまり、そうしたものへの<con->もしくは<ad->とは Defoe にとって<de->のために行うレトリックであるからだ。また、次のテキストもこの読みを裏付けてくれるであろう。<coherent>を<否定>(de-)する Defoe 像こそ彼の<coherency>である。

We do know the facts of his life—the business ventures and the recurring failures, the imprisonment, trips taken, periodicals and books written, marriage settlement, children—but any attempt to unearth a coherent personality from those facts seems doomed to the kind of imaginative desperation committed by some of his biographers. Defoe remains essentially a biographical puzzle. The only man to be seen and the only quality that it seems we can safely guess at is the elusive intelligence which somehow kept functioning brilliantly through disaster.¹²⁾

*

以上読んできた<Daniel De-foe>の意味作用は、どのように *Robinson Crusoe* の物語テキストに実現されているのであろうか。次のテキストに<分離/否定> (de-)、<同化> (con-/ad-)、<反対者 (adversary)> (foe) の戯れを読むことは可能である。

Being the third Son of the Family, and not bred to any Trade, my Head began to be fill'd very early with rambling Thoughts: My Father, who was very ancient, had given me a competent Share of Learning, as far as House-Education, and a Country Free-School generally goes, and design'd me for the Law ; but I would be satisfied with nothing but going to Sea, and my Inclination to this led me so strongly against the Will, nay the Commands of my Father, and other Friends, that there seem'd to be something fatal in that Propension of Nature tending directly to the Life of Misery which was to befall me.¹³⁾ (3)

物語は、Robinson が成人して一人立ちしようという状態から始まる。その時まで Robinson を作り上げてきた原理は、<de->であるとしてよい。<職業教育>は受けていない (not bred to any Trade)、ということは、<固定化> (con-/ad-) の傾向が与えられていないことであり、したがって、<流動> (de-) 的傾向を帯びるのは自然である。<rambling Thought>に充されているという。<rambling>は、<not bred to any Trade>に対立し、

<とりとめもない>と意味作用を起すが、同時に<going to Sea>の伏石として<歩き回る>(de-)の意味作用も可能である。<going to Sea>とはイギリスの<土地><社会><文化>から<分離>(de-)することである。父は<法律家>という<社会>に<同化>(con-/ad-)する職業に就けようという<意図>(design <designare (dē- 下へ + signare 記号で示す=記号で示し書く)>)をもっていた。父の与えた教育は<House-Educaion>及び<Country Free-School>でのものであるが、この<House><Country>はイギリスの<社会>内のものであり、そこでRobinsonが得たものは<a competent Share of Learning>とされている。<competent>とは<com- 共に + pelere 求める + -ent =共に求める→一致する→適した>と語源の意味作用を起す。したがって、<社会>に<同化>(con-/ad-)させる作用をすると読める。こうした父の配慮にもかかわらず、Robinsonが<分離>の傾向を帯び、<固定/同化>のための教育が効を奏さなかったのは、<educate>は語源的に<ē- 外へ + ducere 持ってくる + -atus =能力を持ち出す>と意味作用をし、更には<free>な学校だったから、と読める。また先に暗示したごとく<design>には<de->が内在しているのである。<Father>の<Will><Commands>に対して強力に<反対>(de-)する<Son>。この関係をオイディプス・コンプレックスの<父親殺し>の読みで処理するのも、<神>に背く<Adam/Eve>と読むことも可能であろう。また<父>の立場を<Conformist>、<子>の立場を<Dissenter>として読むこともできよう。しかし、われわれはDanielのテキストにあった<God>と<Nebuchdnezzar/Belshazzar>の関係で読んでおこう。いずれにせよ、<Father>と<God>とは結びつきやすい。この<Father>が<Son>を就けたいと<意図>(design)する職業は<Law>である。これは<法律>の他に<神のおきて>の意味作用を起すことができる。<law>の原義は<置かたもの>であり、<command>は<con- + mandare 手中に置く>で成立しており、いずれも<固定/同化>(con-/ad-)と関係し、<rambling>と対立している。父のRobinsonをイギリスで<法律家>にし<社会>に<固定/同化>させようという意志は裏切られるが、Robinsonは<孤島>で<神の掟>(Law)を見出し、最後には<Governour>となり、悪人たち(罪人)に罰を与えることになる、と読めば、父の意志は実現しているのである。しかし、その実現した状態からも更にRobinsonは<離脱>していく。このように<反対者>(foe)としての<父>から<分離>(de-)するRobinsonが描かれているが、彼はこれからまさに

彼の人生行路を歩んでいこうとしている。今その<人生行路>を<Course>と表わすと、これは<Crusoe>のアナグラムである、あるいはその逆であることが判明する。<the Course of life>に船出しようとする息子<Robinson Crusoe>。

父が子の<離脱>に反対し、社会に<同化/固定>しようと説得する理由は以下のテキストに示されている。

My Father, a wise and grave Man, gave me serious and excellent Counsel against what he foresaw was my Design. He call'd me one Morning into his Chamber, where he was confined by the Gout, and expostulated very warmly with me upon this Subject : He ask'd me what Reasons more than a meer wandering Inclination I had for leaving my Father's House and my native Country, where I might be well introduced, and had a Prospect of raising my Fortunes by Application and Industry, with a Life of Ease and Pleasure. He told me it was for Men of desperate Fortunes on one Hand, or of aspiring, superior Fortunes on the other, who went abroad upon Adventures, to rise by Enterprize, and make themselves famous in Undertakings of a Nature out of the common Road; that these things were all either too far above me, or too far below me; that mine was the middle State, or what might be called the upper Station of *Low Life*, which he had found by long Experience was the best State in the World, the most suited to human Happiness, not exposed to the Miseries and Hardships, the Labour and Sufferings of the mechanick Part of Mankind, and not embarrass'd with the Pride, Luxury, Ambition and Envy of the upper Part of Mankind. He told me, I might judge of the Happiness of this State, by this one thing, *viz.* That this was the State of Life which all other People envied, that Kings have frequently lamented the miserable Consequences of being born to great things, and wish'd they had been placed in the Middle of the two Extremes, between the Mean and the Great; that the wise Man gave his Testimony to this as the just Standard of true Felicity, when

he prayed to have neither Poverty or Riches. (4)

ここに見られる対立は、父の正当なる意見と息子の無謀な企てとである。<wise><grave><serious><excellent>と<meer wandering>の記号がそれぞれを指示しているが、この二項対立では前者が優位に置かれている。その理由は、前者が<in the Middle of the two Extremes><between the Mean and the Great>が指示するように<中間>と関係しているからで、その地帯には<human Happiness><Fortunes><Ease><Pleasure>が約束されているという。ところが後者は<Extreme>と結びつけられているので否定される。<extreme>は<exterus 外の>と<-emus 最上級を示す語尾>からできていて、父の主張する<middle>と対立する。<middle>は<内>で、<upper>も<low>も<外>という思考である。したがって、<go to sea>とはイギリス社会の<内>から<外>へ出ることになるので否定されるのである。<外>の領域は、<desperate> (<despair>→<dē 離れて> + <spereare 期待する>-期待からはずれる) <aspiring> (<a- へ> + <spirare 呼吸する>-に向って息をする) <out of the common Road> <Miseries><Hardships> <Labour> <Suffering>更に<Pride><Luxury> (<Xury>と連鎖) <Ambition> (<amb- あたりに> + <ire に行く> + -t- + -ion -票を求めて動きまわる → 希望を求めて動き回わる) <Poverty>と結びつけられている。この思想はいわゆるブルジョアのものである。つまり、ブルジョアは<外>の領域から<内>に<同化>することを理想としてきたのである。したがって、<外>へと<疎外> (de-) していこうとはしない。これは Robinson の父の来歴が典型となる。

I was born in the Year 1632, in the City of York, of a good Family, tho' not of that Country, my Father being a Foreigner of Bremen, who settled first at Hull : He got a good Estate by Merchandise, and leaving off his Trade, lived afterward at York, from whence he had married my Mother, whose Relations were named Robinson, a very good Family in that Country, and from whom I was called *Robinson Kreutzæer*; but by the usual Corruption of Words in England, we are now called, nay we call our selves, and write our Name *Crusoe*, and so my Companions always call'd me. (3)

父は England の<社会/共同体>にとっては<疎外者 (stranger)>であった。つまり、<de->の状態から、それを<de->し、<共同体>(community) に<同化>(con-)したのである。この事態は<Kreutznaer>から<Crusoe>への<Corruption>(cor->はcon->である)の経過に象徴されている。また、父が最初に<settle>(con-)した場所が<Hull>というのは意義深い。<hull>は<外皮><殻>の意味作用をし、したがって、父は<殻の中に定住した>と読める。つまり<同化>である。そして、父は<York>で名家の娘と結婚したのであるが、<York>を<yoke>に戯れると、<くびき><束縛><きずな>の意味作用を起し、父がいよいよ<共同体>に<同化>し<de->できなくなったことを暗示している。

しかし、<中>(middle)に<同化>した父は果して彼の主張通りに幸福が得られているのであろうか。Robinson の二人の兄のうち、一人はスペイン人との戦いで<Dunkirk>(kirk->は教会>と読むと、<Kreutznaer>は<Kreuz>に読め、<Crusoe>は<Crusade>と戯れることができよう)付近で戦死、もう一人の兄は行方知れずであるという。そして、父自身が現在は<Gout>(痛風)を患っていて、彼の<Chamber>に<confine>されて、出る(de-)ことが出来ないのである。<gout>の語源的意味作用は<drop>であり、<腐った体液のしずくによって生じる>と考えられていた。<drop>の概念と<腐った>(corrupt)はきわめてアイロニカルな意味作用を起す。<社会>的には地位が<上昇>(up)し、<中間>の地位に<固定>(con-)し、経済的、物質的安寧は得られたが、<身体>及び<精神>の内部が<腐敗>し、<下降>していると読める。それはもちろん父が年をとった(ancient)ために起こる身体的衰弱に基づくものかも知れないが、<青年>期の<de->(流動)の運動がなくなり、<con->(固定)の状態になったからである。<ancient>は<a wise and grave Man>に対応しているが、<精神>の<うっ血>状態を表現していると思える。<grave>は<heavy>とも読め、<ancient>は<having the experience and wisdom of age>の意味作用を起すから、<old-fashioned>、<保守>になることである。こうした状況を<幸福>と呼ぶのであろうか。<流動>(de-)を求める<青年>にとって、<欺瞞>のなにものでもないと思つるはずである。Defoe は Robinson を健康で幸福で、生々とした家庭に位置づけはしなかった。ここに一つの記号作用を読むことは決して無理ではない。

かくして Robinson Crusoe は<ancient>な父の<yoke>から<離脱>

(de-) し、<the Course of Life>に船出するわけであるが、彼が<Hull>港から出帆するのは象徴的である。先に示したように<hull>は<外皮/殻><～の殻を取る>の意味作用をし、Robinson が<父/家/社会>の<殻>を<取る>(de-)と読むことができる。これは、<父/家/社会>の<殻>に<保護>されていた子供が大人へと成長していくことを示していることは容易にわかる。更に<hull>は<船体><漂流する>の意味作用をするがRobinson Crusoe の<the Course of Life>を暗示していると読めよう。ついでながら、<Crusoe>は<sailor>になるが、<sail>の語源は古英語<segl>で、これはラテン語の<secare>(切る)と同系で、原義は<切られたもの、一片>という、<Crusoe>→<crew>の戯れと相俟って、物語のテーマにふさわしい。

<hull>の<漂流する>の意味作用が予徴しているかのごとく、Robinson は人生の船出の最初から嵐に出会う。世に出た息子の最初の試練である。その時、若い家出息子は、自らの行為を後悔する——<as I had never been at Sea before, I was most inexpressibly sick in Body, and terrify'd in my Mind : I began now seriously to reflect upon what I had done, and how justly I was overtaken by the Judgment of Heaven for my wicked leaving my Father's House, and abandoning my Duty ; all the good Counsel of my Parents, my Father's Tears and my Mother's Entreaties came now fresh into my Mind, and my Conscience, which was not yet come to the Pitch of Hardness to which it has been since, reproach'd me with the Contempt of Advice, and the Breach of my Duty to God and my Father.>(8)この後悔も、彼を<父/家/社会>へ戻す力とはならない。まさに<reflect>(reflectere 後ろへ曲がる)するだけである。大きな流れとしては、Robinson は<de->の潮流に乗っているのである。したがって、嵐が去ると、その後への曲がりも、元に戻るというわけである——<In a word, as the Sea was returned to its Smoothness of Surface and settled Calmness by the Abatement of that Storm, so the Hurry of my former Desires return'd, I entirely forgot the Vows and Promises that I made in my Distress.>(9)今後、この<後へ曲がる>(con-)と<元へ戻る>(de-)の運動は<反復>されることになるのである。しかし、Robinson の主な運動原理は<de->であり、これは、彼が出会う嵐の時にも見ることができる。ヤーマス港を控えたテムズ川の河口

で投錨しているうちに、大嵐に襲われ、彼の乗った船は<沈没> (de-) し、他の船に救助される。<救助>されるとは、<死>を<否定> (de-) することである。船の<沈没>は<founder>と表現されているが、この記号が<(馬が) びっこになる><(沼などにはまって) 動けなくなる>と意味作用することを知ると、Robinson の父の<gout>で動けない事が想起されてくる。つまり、<con->の状態であり、船が、人が<de->している限り<生>につながっているのである。ちなみに、Crusoe 家の<創立者> (founder) が父であったのは、皮肉な記号の戯れといえよう。また、<Yarmouth>の原義は<mouth of the River Yare>であり、<Yare>を<yare>とすれば、<用意のできた><活発な><(船が) 舵ききのよい、操縦しやすい>と意味作用し、やはり皮肉が感じられよう。

この体験にこりることなく、Robinson はアフリカ行きの船に乗るのであるが、その間の事情はこう説明されている。

But my ill Fate push'd me on now with an Obstinacy that nothing could resist; and tho' I had several times loud Calls from my Reason and my more composed Judgment to go home, yet I had no Power to do it. I know not what to call this, nor will I urge, that it is a secret over-ruling Decree that hurries us on to be the Instruments of our own Destruction, even tho' it be before us, and that we rush upon it with our Eyes open. (14)

ここに<de->と<con->の対立が支配していることは容易にわかる。<私を駆り立てる存在> (de-) と<家へ帰そうとする理性> (con-)。<obstinacy>の<ob->(対して)は<de->に通じ<composed>(静かな)は<com->(共に)と<pose>(置く)から出きている。そもそも<reason>とは IE では ar- と推定され、これは<to fit together>の意味作用をしたという。つまり<con->である。<de->の力は<ill Fate>と呼ばれ、<私>の外に位置づけられている。それに対して、<con->の力は<私>の内部に位置づけられているとしてよい。この<ill Fate>は、しかし、<a secret over-ruling Decree>とはされていない。つまり、Robinson は<神意>に<反抗>(de-) していると考えているからである。ところが、<ill Fate>は、<外>から<内>へと移行していくのである。次のテキストでは、それが<Shame>、

あるいは<Reason>に対立する <incongruous and irrational> な <the common Temper of Mankind>に置き換えられている。

As to going Home, Shame opposed the best Motions that offered to my Thoughts; and it immediately occur'd to me how I should be laugh'd at among the Neighbours, and should be asham'd to see, not my Father and Mother only, but even every Body else; from whence I have since often observed, how incongruous and irrational the common Temper of Mankind is, especially of Youth, to that Reason which ought to guide them in such Cases, viz. That they are not asham'd to sin, and yet are asham'd to repent; not asham'd of the Action for which they ought justly to be esteemed Fools, but are asham'd of the returning, which only can make them be esteem'd wise Men. (15-6)

<Neighbours>とは<共同体>のことであり、そこを<否定>(de-)した者が、その<否定>を<否定>して<戻る>(con-)ことが<Reason>の説得であるが、<Shame>がそうはさせない。つまり、<Fool>(irrational)と判断される<Action>をすること、つまり<Reason>からの<de->は<Shame>を呼び起さないが、<wise>(rational)と思われる<Action>つまり<con->すること (<return>→re- 後へ+ torner 曲る)が<Shame>を起す。<ashamed>の<a->は<away>などを示し、<de->のパラダイムに属するのである。

この<de->の力はまた<evil Influence>とも呼ばれている。これは、上で述べた<外>から<内>への<de->の力の所在の移行にみあう記号である。<influence>は<in- 中へ>と<fluere 流れる>、及び<-ia>でできていて、<中へ流れ込む>を原義とし、<星が流れ込むことによって起こる力>と考えられた。この<外>から<内>への転換は、Robinson の<社会>という<内>から<世界>という<外>への動きの逆になっていることに気づくであろう。結論的に言うなら、Robinson の<de->の運動、それは<共同体>が<教育>によって<固め>てつくり上げた表層的<存在>(individual)から深層的<存在>(person)への<流浪>(de-)であったといえよう。

かくして、<不合理>によって駆り立てられ、Robinson はアフリカの海岸

への航海に出る。しかし、<I did not ship my self as a Sailor>というように、<船員>として航海に出たのではなく、<in the Habit of a Gentleman>であった。これは、Robinsonは<it was always my Fate to choose for the worse>と言うのだけれど、一つの職業に<固定>(con-)されることを拒否する姿勢を表わしているのである。しかし、秀れた船長にロンドンで出会い、数学、航海術などを学び、<a Sailor and a Merchant>になる。これは、Robinson が<de->の流れの中で生きるための必修な<知>であり、これにより一人の大人に成長したことを暗示しているのであろう。

その船長がギニー地方との交易後死に、新しい船長と共にまたギニー地方へ航海に出かける。この死は、<師>の死であり、やはり、Robinson の一人立ちを強調する記号性を有しているであろう。この航海で、Robinson は不幸に会おう。

Our Ship making her Course towards the *Canary* Islands, or rather between those Islands and the *African* Shore, was surprised in the Grey of the Morning, by a *Turkish* Rover of *Sallee*, who gave Chase to us with all the Sail she could make. (18)

このテキストにおいて<towards the *Canary* Islands>が<between those Islands and the *African* Shore>と<置換>(or rather) されているのは何故か。<the *Canary* Islands>の近くであることには問題はないが、<もっと適切な言い方をすれば><中間>に進路をとっていたという。何故<もっと適切な言い方>なのか。<the Grey of the Morning>の記号連鎖が示すように、<未明>とは、<夜>と<朝>の<中間>である。しかも、<grey>には<中間の>という意味作用がある。つまり、テキストは、この<中間>を<適切>としているわけである。<towards>は<con->に通じ、<between>とは<de->の状態にあるからである。<Rover>とは<海賊>のことであるが、<放浪者>の意味作用を起し、<rove>は<流浪する>である。つまり、<de->を本質とするわけで、彼らこそ<中間>の存在である。Robinson は、<a Sailor>であり<a Merchant>として<固まり>(con-) つつあった。これは<towards>が指示しているだろう。その<固まり>を<流動>化する契機が、<Rover>による<反撃>(sally)、ないし<奇襲>(surprise) であった。そして、Robinson らは<yield>(de-) し、<Prisoners>(con-)

として<Sallee>に連れていかれる。Robinsonは<the Captain of the Rover>の<Slave>となり、他の仲間たちは<the Emperor's Court>に連れていかれる。この二つの捕虜の処遇は興味深い。<the Emperor>(im-の中に+ *parare* 用意する + -or =用意する人)の<Slave>になるとは、<con->の状況が強調され、<the Captain of the Rover>の<Slave>ということは<de->が強調されるからである。物語的には、<de->を追求する Robinson に逃走経路を設けるためである。この事件での Robinson の事情は次のテキストが見事に表現しよう——<At this surprising Change of my Circumstances from a Merchant to a miserable Slave, I was perfectly overwhelmed.> (19) <change>という<de->。<overwhelm>に<水中に沈める>の意味作用があるから、これも<de->に通じており、今回 Robinson は<難破>はしなかったものの、<難破>(de-)の反復としてこの事件が位置づけられていることがわかる。<奴隷>は<船員/商人>という<自由人>の<否定>(de-)形であり、<敵/悪意を抱く人>(foe)によって、身分を<降下>(de-)させられた存在である。

しかし、<Slave>に<con->されることを<拒み>、そこから<離脱>(de-)しようと努力をする。

As my new Patron or Master had taken me Home to his House, so I was in hopes that he would take me with him when he went to Sea again, believing that it would some time or other be his Fate to be taken by a *Spanish* or *Portugal* Man of War; and that then I should be set at Liberty. But this Hope of mine was soon taken away; for when he went to Sea, he left me on Shoar to look after his little Garden, and do the common Drudgery of Slaves about his House; and when he came home again from his Cruise, he order'd me to lye in the Cabbın to look after the Ship.

Here I meditated nothing but my Escape; and what Method I might take to effect it, but found no Way that had the least Probability in it: Nothing presented to make the Supposition of it rational; for I had no Body to communicate it to, that would embark with me; no Fellow-Slave, no *Englishman*, *Irishman*, or *Scotsman* there but my self; so that for two Years, tho' I often pleased my

self with the Imagination, yet I never had the least encouraging Prospect of putting it in Practice. (19)

<Patron>とは<pater 父 + -onus 父のように保護する人>を原義とするのは興味深い。この<父>は、Robinson の生みの親としての<父>の反復を表現しているからである。この新しい父は、自ら<go to Sea> することではRobinson の父と対照を成しているが、Robinson を<go to Sea> させず、彼の<家> <土地>に<息子> を<閉じ込める> ことでは共通している。<Shore>とは<切り立った崖>であり、<Garden>とは<fence>を原義とし、<Cabbin>には<confine>の意味作用がある。また<Garden>を<Paradise> と読み換えるなら、それは<enclosure>を原義にしていたはずで、<Paradise>にいる者が実は<Slave>だというのは皮肉であろう。こう考えれば、Robinson の父の約束した中間地帯の<楽園>も、逆照射されてこよう。全ては<con->。この新しい父が<Cruise>の記号と結びつけられているのに注意してよい。<Crusoe>に近いのである。

Robinson はスペインかポルトガルの<Man of War>に自分の<Patron> が<captive>になることで、自分が<Slave> (con-) から、<at Liberty> (de-) (<deliver>とは<de-> + <liberare>)になると期待する(<hope>の語源は、不確かながら<to leap up in expectation>らしい。ここから<de->しようとするが、<con->されてしまうという様子が想起される)が、それが<否定>(de-)される。しかし、<Cabin>(here)の中で、<Escape> (de-) のことだけを企てていた (meditate)。この状況は<con->と<de->の<中間>(medi(o)-) 地帯にあることである。そして、彼には<communicate> する<仲間>がないという。<Fellow-Slave>とは<Englishman> <Irishman> であり<Scotsman> である。つまり、Robinson が<離脱> (de-) してきた<社会>のことである。ちなみに、<Englishman> <Irishman> <Scotsman>の順序は何を語っているのか。<Englishman> である Robinson にとって<社会>として親しい存在の順序であろう。

2年程経ってから、逃亡計画実現の契機が訪れる。主人の親類のモール人 (Moor) と、<Xury>という名の若い奴隷と一緒に魚釣りに出かけた時であった。船を沖に進め、モール人を海にほうり込み、逃げる態勢はできた。その時の状況をこうテキストは表現している。

I could ha' been content to ha' taken this *Moor* with me, and ha' drown'd the Boy, but there was no venturing to trust him: When he was gone I turn'd to the Boy, who they call'd *Xury*, and said to him, *Xury*, if you will be faithful to me I'll make you a great Man, but if you will not stroak your Face to be true to me, *that is, swear by Mahomet and his Father's Beard*, I must throw you into the Sea too; the Boy smil'd in my Face and spoke so innocently that I could not mistrust him; and swore to be faithful to me, and go all over the World with me. (23)

ここで注目しなくてはならないのは、Robinson が <Patron> の親類の <Moor> を海に投げることで、<Slave> の身分から <離脱> (de-) し、一転して <Patron> になることである。<moor> は <(船を) つなぎ留める> <(一般に) 固定する> の意味作用を起すので、<Moor> を海に投げることは、<Slave> の <否定> (de-) の象徴的儀式となる。つまり、<父> (Patron) の <否定> である。それによって、今度は <父> (Patron) になるのである。これは、<父/家/社会> からの <自立> を完成させたこと、身体的だけでなく、精神的 <自立> の象徴となっている。<faithful> (忠実な/信心深い) であることを要求して、自らを <Mahomet> 及び <his Father> の地位に位置づけている。<faithful> であれば、<a great Man> にしてやるという約束は、Robinson の父の約束に何か似ている。父たる者の運命的な言葉か。<great Man> とは <身分の高い人> であり <大人> である。Xury を <息子> として、Robinson は <父> になった。この後 Robinson は物語の展開の中で、Friday という <息子>、英国へ戻ってから彼の兄の甥二人を <息子> にし、更には <結婚> により、二人の <息子> と一人の <娘> をもつ <父> となっている。この意味から言えば、Robinson は <孤島> を <有人化> したのであるから、<島> の <父> ともいえよう。

Robinson と Xury という <父> と <息子>、もしくは <主人> <奴隷> が船で逃亡する間の記述は次のテキストで示されている。

While I was in View of the *Moor* that was swimming, I stood out directly to Sea with the Boat, rather stretching to Windward, that they might think me gone towards the *Straits-mouth* (as

indeed any one that had been in their Wits must ha' been supposed to do) for who would ha' suppos'd we were saild on to the southward to the truly *Barbarian Coast*, where whole Nations of Negroes were sure to surround us with their Canoes, and destroy us; where we could ne'er once go on shoar but we should be devour'd by savage Beasts, or more merciless Savages of humane kind. (23)

これまで Robinson は2つの<foe>としての領域から<逃走> (de-) してきた。イギリスという<文明社会>、そして、<奴隷制度>を有するアフリカの北海岸の皇帝の領土、海賊の Moor 人の領地である。そして、今度の<foe>は<southward>にある<the truly Barbarian Coast>となる。したがって、その<foe>から<de->するために、またしても<中間>の領域を選ぶ。それは<流動>を可能にする<海>である。しかし、水を得るために最初に上陸した所はこうである——<By the best of my Calculation, that Place where I now was, must be that Country, which lying between the Emperor of Morocco's Dominions and the Negro's, lies wast and uninhabited, except by wild Beasts.> (26-7) つまり<中間>、<de->が強調されているのである。この<中間>のこのテキストにおける記号性は高い。Robinson の父が主張した<中流>、子の求める<流動>のための<中間>。この<中間>は Daniel の<interpreter>としての<中間性>に通じているであろう。

航海を続け (de-)、Robinson と Xury とは、イギリスでもモロッコでもないポルトガルという<中間>の船に助けられる。それは、Robinson が<Dilemma> (中間)の状態にあったときである。彼らはブラジルへと渡ることになるが、航海中 Robinson は助けてくれた船長に持ち物を買ってもらい、同時に Xury を譲ってほしいといわれる (所有物の<de->)。その時の Robinson の処理はこうである。

... he offer'd me also 60 Pieces of Eight more for my Boy *Xury*, which I was loath to take, not that I was not willing to let the Captain have him, but I was very loath to sell the poor Boy's Liberty, who had assisted me so faithfully in procuring my own

However when I let him know my Reason, he own'd it to be just, and offer'd me this Medium, that he would give the Boy an Obligation to set him free in ten Years, if he turn'd Christian; upon this, and Xury saying he was willing to go to him, I let the Captain have him. (33-4)

Xury が Robinson から約束された <a great Man> とはこういう内容であった。Robinson が彼の <Liberty> を獲保するまで <faithfully> に援助してきたその代償が、<60 Pieces Eight> で <Liberty> を売られる、<商品>として売られることであった。確かに、キリスト教に改宗（回教から <de->して、キリスト教に <con->する）して、10年後に <free> になるという <Medium> (<中間>) がつけられはしたが。これは、Robinson が <中間> から <de->した時に、つまりイギリスではないが、それでも類似の <文化> へと <con->した時に起ったことである。Xury は10年後、<Slave> から <free> になろう。しかし、彼は <文明>、ヨーロッパ文明に <虜われ>ることになる。その象徴は、彼が <God> の <Slave> になること。Xury は常に <con->から <離れ>ることはできそうにない。それにしても、Robinson に Xury を売る権利はあるのか。いつ、Xury は Robinson の <Slave> となったのか。象徴的にそうなったことは、先に述べたが、現実的にそうなったことはあったか。この問題はテキストのレトリックである。<Christian> になること、<Liberty> を得ること、この両方を等号で連結するためのレトリックである。<Mahomet> からの <自由> を <Christian> になることで保証するというわけである。この論理の理解には、<Daniel> のコードが必要である。

ブラジルに着くと、Robinson は農園の経営者、つまり資本家になる。しかし、人手が不足し、労働に明け暮れる。その時、Robinson はこう反省する——<...now I found more than before, I had done wrong in parting with my Boy Xury.> (35) これは <de-> (parting) への反省で、例によって Robinson のいつもの運動である。しかし、この Xury への <con-> は、Robinson の現状の <con-> の生活からの <離脱> (de-) の想いのためである。

But alas! for me to do wrong that never did right, was no great Wonder: I had no Remedy but to go on; I was gotten into an Employment quite remote to my Genius, and directly contrary to the

Life I delighted in, and for which I forsook my Father's House, and broke thro' all his good Advice; nay, I was coming into the very Middle Station, or upper Degree of low Life, which my Father advised me to before; and which if I resolved to go on with, I might as well ha' staid at Home, and never have fatigu'd my self in the World as I had done; and I used often to say to my self, I could ha' done this as well in *England* among my Friends, as ha' gone 500 Miles off to do it among Strangers and Salvages in a Wilderness, and at such a Distance, as never to hear from any Part of the World that had the least Knowledge of me. (35)

ここで Robinson は <Slave>(con-) から文字通り <Master> となるにもかかわらず、その実体は <Slave> と変わることがない。<労働> という <foe> に、<con-> されているのである。このアンビヴァレンスに注目してよい。この <Master/Slave> の生活とは、<con-> の生活であり、これは <an Employment quite remote to my Genius> であり、<contrary to the Life I delighted in, and for which I forsook my Father's House> である。つまり、<de-> の生活こそ Robinson の求めていたものであったはずである。<my Condition>(con- 共に + *dicere* 言う + -ion -- 致すること) とは、こうである——< I had no body to converse with but now and then this Neighbour; no Work to be done, but by the Labour of my Hands: and I used to say, I liv'd just like a Man cast away upon some desolate Island, that had no body there but himself.> (35) ここは、一見 <community> を Robinson は求めていると、読めるようであるが、そうではない。<con-> の <否定>(de-) こそ主張している のである。なぜなら、<a Man cast away upon some desolate Island, that had no body there but himself> こそ、彼の <de-> の運動の一応の目標だからである。彼の現在置かれている場は <孤島> に <類似> しているだけで、やはり <the very Middle Station> であるからだ。まがりなりにも <文明社会> に一応は組み込まれているのである。

ここで注目していいこと、それは Robinson がイギリス社会にいるわけではないのに、イギリス社会の尺度で様々な判断を下すということである。ここには <社会制度> もしくは <文化> と <個人> が <教育> を媒介として関係づく

メカニズムが暗示されている。〈個人〉が〈教育〉という名のもとで〈社会制度〉に組み込まれ、その制度及びその制度的コードが、その〈個人〉の存在性、社会的存在性と同時に実存としての存在性をも構成していることがわかる。〈文化／社会〉とは〈個人〉にとって、一種の〈獄舎〉(prison)であり、そこに〈個人〉は〈confine〉されていく。それは、まさに、Robinsonの父がそうであった。そして、自己の置かれた状態が最高のものと満足する(〈content〉→〈con- 共に〉+〈tinere 含む〉+〈-tus -すべて含まれた〉→なんの不足もない)。〈社会〉化された〈個人〉が満足する、これは〈社会〉の〈安定〉(con-)につながるが、それは同時に、その〈社会〉構造を利用している〈個人〉の権力を許すことである。

Robinson Crusoe は、一つの読みとして、どれだけ〈人間(個人)〉は、〈文化／社会〉から〈自立〉(de-)しうるかの物語として眺めることができる。ここから、オイディプス・コンプレックス的読みも、また〈個人主義と私企業というブルジョア的価値をたたえる物語〉¹⁴⁾ という読みも派生しうる。〈文化／社会〉の代りに〈父〉、〈王権／国家〉を置けばよい。これと関係して、〈知〉と〈権力〉の関係を問う物語とも言えよう。〈社会〉が〈個人〉に与える、もしくはおしつける管理された〈知〉は、〈個人〉を〈獄舎〉に封じ込める。しかし、〈個人〉が自ら求め、体験によって得た〈知〉とは、〈個人〉を解放する。〈con-〉のための〈知〉と〈de-〉のための〈知〉とでもいおうか。しかし、〈de-〉のための〈知〉といえど、いつ〈他者〉を〈抑圧〉する〈権力〉へと転化するかも知れない。その〈転換〉の契機を物語るのが、Robinsonが〈孤島〉に流れ着いてから後のテキストであるとしてよい。

〈孤島〉に漂着したRobinsonは、その〈場〉については〈無知〉である。しかし、〈知〉と〈孤絶〉(de-)したRobinsonではない。この点に注意が必要である。イギリス社会が与えた〈知〉、かつて船長が教えてくれた〈知〉、自らの体験で得た〈知〉がある。これらの〈知〉は均質的ではありえず、それぞれ〈場〉に応じてどれかが〈優越性〉を示すことになる。Robinsonにとって〈未知〉のこの島では、イギリス社会の与えた〈知〉は無力である。つまり、〈con-〉のための〈知〉は活躍の場を失い、〈de-〉のための〈知〉が〈優越〉する。〈知〉の自然淘汰である。〈de-〉の〈知〉とは、実に人類が太古から、〈自然〉との闘争(de-)及び協調(con-)関係の中で獲得してきたものであり、〈自然〉の中で〈生きる〉(de-)ために得てきた〈知〉である。それは〈個人〉を〈獄舎〉に封じ込めるための類いのものではない。〈個人〉が

<自然>の<猛威>(foe) から<離脱>(de-) するための<知>であった。この<知>は、しかしながら、必要以上に増殖すると、<権力>のための<知>へと転換してしまう。<自然>(foe) の支配、そして<他者>(foe) の支配のための<知>。Robinson は<孤島>で、まずは<生存>に最低限の<知>の行使から出発する。いや、多少の<余剰>的<知>からの出発であるのかも知れない。<銃>の<知>、<文字>の<知>、そして<神>の<知>の存在。おそらく、これらの<知> が不在であれば、28年余りで<島>に対して<全知>となる位置につくことは不可能であったろう。ともかく、Robinson は彼が出发点に保有していた<知>で武装し、<孤島>を制圧していく。彼の島での<知> が、<de->から<con->のための<知>、<権力>の<知>へと転化するのには、<島>に<他者>が存在するようになってからである。人喰い人種にまさに喰われんとしている敵対的人喰い人種の青年を、Daniel をライオンから救済した神のように救済するとき。また、彼を<島> から<離脱>させてくれることになる船の船長をその反逆者の手から救うとき、Robinson は<全知>の位置にいる。最後は島の<Governor>となる。しかし、*Robinson Crusoe* のテキストは、この<con->の<知>の危険性を追求することなく、むしろ隠そうとさえしている、といえよう。なぜなら、この<知>が、<個人>の<生>のための<知>(de-) にすりかえられてしまっているからである。更に、Robinson は<権力>を得ると、すぐにその座から<離脱>(de-) する、つまり、<孤島>を去るからである。他のテーマである<de->に身をゆだねる Robinson、そこからの当然の成り行きではあるが。

今一度もとに戻って、Robinson の<孤島>での<con->の<知>と<de->の<知>の弁証法を具体的に考えてみる。この物語は Robinson が農園の労働者として<Negroes>を買いつけに行く航海で難破し、一人助かり孤島に漂着するところから始まる。<Company> の存在しない領域が人工的に設定されたところからである。

島へ上陸するまでのテキストは<con->と<de->がめまぐるしく交替している—<... the Ship struck upon a Sand, and in a moment her Motion being so stopp'd, the Sea broke over her in such a manner, that we expected we should all have perish'd immediately, and we were immediately driven into our close Quarters to shelter us from the very Foam and Sprye of the Sea.> (42) <Ship>は風に吹かれ、波に乗り<de->の状態にあったのが、ここで<固定>(con-) してしまった。

<the Sea>はRobinsonらにとって<foe>である。そこから<逃れる>(de-)のために、ボートを<舷側から下し>(de-)、11人が<God's Mercy>と<the wild Sea>に身むく任せた(<commit>)。しかし、しばらくすると大波に飲み込まれてしまう——<a raging Wave, Mountain-like, came rowling a-stern of us, and plainly bad us expect the Coup de Grace. In a word, it took us with such a Fury, that it overset the Boat at once; and separating us as well from the Boat, as from one another, gave us not time hardly to say, O God! for we were all swallowed up in a Moment.> (44) <波>がRobinsonらに<con->してくる。その<同化>の瞬間が<the Coup de Grace>である。それは、同時にRobinsonらの<生>からの<離脱>であり、<死>への<同化>である。<overset>は<de->の<removal>の意味に通じ、<separate>は<分離>である。この<foe>としての<a raging Wave>から<de->しえたのは、Robinsonだけらしかった。<波>に飲まれ、沈む(de-)ときは、<the Confusion of Thought>の状態にあった。彼はなんとか<half-dead>(中間)の状態で、浅瀬に近づき立ち上ろうとしたが、再度波に飲まれる。

The Wave that came upon me again, buried me at once 20 or 30 Foot deep in its own Body ; and I could feel my self carried with a mighty Force and Swiftness towards the Shore a very great Way ; but I held my Breath, and assisted my self to swim still forward with all my Might. I was ready to burst with holding my Breath, when, as I felt my self rising up, so to my immediate Relief, I found my Head and Hands shoot out above the Surface of the Water; (45)

かくしてRobinsonは<救出>(de-)されたわけであるが、その際彼の置かれた状況、つまり<沈み>、<死>にひんして<海面>に浮かぶこと、それは<robin>の記号が暗示する<death and resurrection>を表象しているであろう¹⁵⁾。<resurrect>の語源<resurrectio>は<resurgere 浮き上る>の意味作用を内包しているのである。ちなみに、<robin>は<a form of the storm-cloud bird>とゲルマン文化では考えられている。¹⁶⁾そして、Robinsonがこうして<water>に浸ることの記号性は当然<baptism>であろう。ここに次のテキストがあり、参考になる。

The waters are (also) equated with the continual flux of the manifest world, with consciousness, forgetfulness; they always dissolve, abolish, purify, 'wash away' and regenerate; they are associated with the moisture and circulatory movement of blood and the sap of life as opposed to the dryness and static condition of death; they revivify and infuse new life, hence baptism by water or blood in initiatory religions in which the water or blood also washes away old life and sanctifies the new. Immersion in water not only symbolizes the return to the primordial state of purity, death to the old life and rebirth into the new, but also the immersion of the soul in the manifest world.¹⁷⁾

確かに Robinson は<Water>にひたることによって、<高度に発達した文明>から<離脱>し、<原初的な純粹の状態>へ戻ったかに見える。しかし、そうではなく、先述の通りに<文明の原初>に近い時点への<回帰>である。われわれは<con->の<知>から<de->の<知>への<回帰>と読みたい。<the dryness and static condition of death>(con-)ではなく、<Water>は<the moisture and circulatory movement of blood and the sap of life>(de-)を象徴しているからである。

Robinson の<死>からの<離脱>は決して<生>への<固着>(con-)ではない。彼の置かれた状況とはこうである——< I was wet, had no Clothes to shift me, nor any thing either to eat or drink to comfort me, but that of perishing with Hunger, or being devour'd by wild Beasts; and that which was particularly afflicting to me, was, that I had no Weapon either to hunt and kill any Creature for my Sustenance.> (47) つまり、その状況には<生>からの<離脱>の契機が充満しているのである。<no>の連鎖はその記号となっている。Robinson の置かれた状況は<生>と<死>の<中間>である。この<中間>とは父が勧めた<中産階級>という<固定>したものではなく、<de->が積極的に生産される場である。<死>と<生>の<差異>(difference)という狭間である。この<de->を生産する<差異>、もしくは<de->の生産する<差異>こそ<Robinson Crusoe>の指示することがらである。

上陸し、疲労のために眠り、翌日船に<Necessaries>を取りに行く。<ne-

cessary>の語源は<necessarius>で、<ne-ない> + <cedere ゆずる> + <-arius>から出来ていて、<ゆずることのできない>を意味作用としている。これは<de->のパラダイムに含めることができる。<de-> + <foe>である。それは<食糧>として、<Bisket> <Rum> <Bread> <Rice> <three Dutch Cheeses> <five Pieces of dry'd Goat's Flesh> <a little Remainder of *European* Corn>, <衣料> <大工道具> <弾薬> <猟銃> <短銃>とされる。これらは、Robinson が判断・選択したものであるが、何に対して<必要>なものなのであろうか。明らかに、一個の人間にとって、ではなく、文明社会から<離脱>し、<自然>の中で<生>を維持しなくてはならない人間にとって必要なものである。上記の品物は、全て<文明>の所産である。この<必要>なものを Robinson の手に入ることを可能にしたのは Dofoe という原理であるが、その記号性は考えられてよい。先述のように<文明>に教育され、存在に<文明>が浸透した人間は、文明の所産を抜きに、文明度ゼロの状態から再出発はできない、ということである。後になされるように、Robinson は自分で道具を生産することになるから、ゼロ度からの出発も可能であったはずだが、そうしなかったことの記号性は、文明人の文明化の度合を強調するためであったと思える。先に示したように、<de->のための<知>と<con->のための<知>の概念を導入すれば、<必要なもの>は<de->のための<産物>だけに、非文明的地域においても有効である。これに対して、<con->の<知>の<産物>、<記号>的産物は非文明の地では無効とされる。その典型は<Money>である。この存在は<記号>性の高さ故に Robinson にとって現在<必要なもの>ではない。

I smil'd to my self at the Sight of this Money, O Drug! Said I aloud, what art thou good for, Thou art not worth to me, no not the taking off of the Ground, one of those Knives is worth all this Heap, I have no Manner of use for thee, e'en remain where thou art, and go to the Bottom as a Creature whose Life is not worth saving. (57)

文明社会は<余剰>を生産し、それを記号化し、制度として<固定>する。その<記号>としての<モノ>は、<モノ>そのものの価値によって存在するのではなく、<制度/体系>内における<差異>によって存在する。その存在

価値を人間の生存に必要なものとして<個人>に教育するのが<文明>である。<Money>はその存在性を保証する<制度/体系>をこの孤島では喪失(de-)しているが故に、<価値>を有さない。しかし、Robinson は<考え直して>持って行くことにする。この記号性は何か。Robinson の文明社会への未練、ひょっとして助かった折には文明社会で<価値>を有するという期待(これは実現する)。この他に、彼がいかに文明化的存在であることを示している。もう一つの機能、それは<考え直す>という<de->の運動を指示することである。

Robinsonが、まず着手しなくてはならないこと、それは<住居>の建設(construction)である。まず<Tent>が架設される。その材料は周囲の植物を利用してのものではなく、<帆布>という文明の産物であるが、われわれは<転用>の際の<de->に注目してよい。<帆布>から<Tent>へ。Robinson が<Tent>を張る際にとった手順はこうである。

Before I set up my Tent, I drew a half Circle before the hollow Place, which took in about Ten Yards in its Semi-diameter from the Rock, and Twenty Yards in its Diameter, from its Beginning and Ending.

In this half Circle I pitch'd two Rows of strong Stakes, driving them into the Ground till they stood very firm like Piles, the biggest End being out of the Ground about Five Foot and a Half, and sharpen'd the Top; The two Rows did not stand above Six Inches from one another. (59)

この作業は、まず Robinson がこの島で彼の<テリトリー>を確定した最初の作業と読むことができる。島全土の支配権獲得の第一歩に他ならない。この時、何故 <a half Circle> が描かれたのであろうか。<Circle>でなく。実用的な記号作用は、後ろが岩で防衛に好都合ということがある。しかし、象徴的意味作用がありうる。<Circle>の象徴的意味作用は以下のとおり。

A universal symbol. Totality; wholeness; simultaneity; original perfection; roundness is sacred as the most natural shape; the self-contained; the Self; the unmanifest; the infinite; eternity; time

enclosing space, but also timelessness as having no beginning or end, and spacelessness as having no above or below; as circular and spherical it is the abolition of time and space, but also signifies recurrence. It is celestial unity; solar cycles; all cyclic movement; dynamism; endless movement; completion; fulfilment; God: 'God is a circle whose centre is everywhere and circumference is nowhere' (Her mes Trismegistus).¹⁸⁾

したがって<half>によって、この象徴性が否定もしくは変更されていると読めないであろうか。Robinson はこの孤島で<原初の完全>を得るわけではない。<a half Circle>に<Beginning>と<Ending>があるということは、<timeless>でないこと、つまり Robinson の島での生活には<Beginning>と<Ending>があることを示していよう。Robinson は島の生活にヨーロッパの暦を持ち込むことで、<time>を分節化する。この Robinson の<time>は<Beginning>と<Ending>を有する<カイロスの時間>であり、それは1659年9月30日から始まり、1686年12月19日に終わる直線的時間である。実に<創世記>と<黙示録>を有する<時>であり、Robinson は島を去る時、<Governor>として<罪人>たちに<審判>を下す。更に<島>は<Sea>に囲まれた空間で、<spaceless>ではない。<God>を Robinson は最終的に自己の内部に確立するが、絶えず<信仰>と<不信>の<中間>を往復している。

<a half circle>そのものの象徴的意味作用もある——<The lower half of the semi-circle is the Low Waters and the ark and the upper half is the Upper Waters and the rainbow.>¹⁹⁾ ここにある<the Low Waters>とは更に<chaos, or the ever-changing manifest world>で<the High Waters>とは<the realm of the unifying waters>である。では Robinson にとって、<the Semi-Circle>は<the low half>か<the upper half>か。眺める位置によって、どちらにもなりうる。どちらかといえば、時の経過にともなって、彼にとっての<島>は<the low half>から<the upper half>へと移行すると考えられる。<混沌>から<統一>へ。つまり<de->から<con->へである。<ark>の象徴的意味作用はこうである——<feminine principle; bearer of life; the womb; regeneration; the ship of destiny; a vehicle for carrying and transmitting the life principle; preservation.>²⁰⁾ 確かに、Robinson はこの<a half circle>に沿って

柵をめぐらし、〈生命〉を維持しようとする。Robinsonは〈a Cave just behind my Tent, which serv'd me like a Cellar to my House〉(60)を〈岩〉に掘る。この〈Cave〉とは〈the womb〉と見做せる。〈the half-Circle〉の外に〈English Barley〉(78)が偶然から生育してくる。〈種子〉からの〈生命〉の再生である。また、〈島〉自体が〈the ark on the waters〉であるはずである。Robinsonの遭遇した嵐は、〈the flood〉であり、彼は生き残った Noah である。更に〈ark〉は〈the Church in which man should be saved, safely riding the waters of life〉〈Christ, saviour of mankind〉²¹⁾と意味作用すると見れば、Robinsonが〈島〉で〈God〉を見い出していくのは当然である。また、〈島〉を〈Church〉と見做すと、その内部にありながら、聖書だけに依拠し、〈God〉を見出し、ついには島を〈離脱〉する、これは〈Dissenter〉について述べていると読めよう。

Robinsonは〈a half Circle〉に沿って〈Fence〉を強固につくるが、その性質とはこうである——〈so strong, that neither Man or Beast could get into it or over it〉(59) (〈fence〉は〈garden〉へ、そして〈paradise〉へと連鎖していたことを想起してよい)。〈fence〉は〈defence〉のメトニミーであり、〈de-〉を潜在化している。その〈離脱〉の対象の〈foe〉とは、〈Man〉と〈Beast〉である。以後〈住居〉の建設は続けられるが、常に〈de-〉〈foe〉を原理としていることが知れる。また、この過程でテキストが明らかにしていることは、Robinsonの発想が〈文明〉的であるということである。既に指摘したが、彼の生産物は文明の〈イデア〉に基づいている。たとえばこういうテキストがある——〈The excessive Hardness of the Wood, and having no other Way, made me a long while upon this Machine, for I work'd it effectually by little and little into the Form of a Shovel or Spade, the Handle exactly shap'd like ours in England〉.(73) この一例がメトニミー的に暗示していることは、〈England〉という〈文明〉のメトニミーからのRobinsonの〈離脱〉(de-)は、〈空間〉的なものにすぎず、〈文明〉そのもの、〈England〉そのものからの〈離脱〉ではないことである。この意味で、Robinsonは〈文明〉の過程の〈時間〉的反復のために〈空間〉的離脱をしたといえよう。したがって、〈離脱〉の本質的な方向性は〈外〉ではなく〈内〉に求められなくてはならないだろう。〈心〉の中への〈離脱〉。特に〈God〉の発見はそのメトニミーである。

〈文明〉の〈時〉の反復の始源は〈a great Cross〉(64)を形成する〈a

large Post>(64) に刻まれた日付である——< I came on Shore here on the 30th of Sept. 1659>(64). 以後この<a large Post>は Robinson の<時>を<分節>化していく。この<文明>の<時>の反復の過程の中で、かつて<拒絶>(de-)されていた<理性>が優越してくることは注目に値する。

I now began to *consider seriously* my *Condition*, and the *Circumstance* I was *reduc'd* to, and I drew up the State of my Affairs in Writing, not so much to leave them to any that were to come after me, for I was like to have but few Heirs, as to *deliver* my Thoughts from daily poring upon them, and *afflicting* my *Mind*; and as my *Reason* began now to master my *Despondency*, I began to *comfort* my self as well as I could,...(65) (イタリクス筆者)

このテキストにも<de->と<con->の対立はあるが、明らかに<de->は<con->に従属させられている。<con->を生み出すために、<de->が存在化させられている。自らの<閉ざされた><Condition>を考えるために、<Writing>が使われるが、これは<de->の作用をしている。つまり、<思考>を頭の<外>に<deliver>するからである。そうすることで<Reason>という<con->の典型が、<Despondency> (*de-+spondere* promise) を支配し、<comfort>が得られるという。このように一応は読める。かつてRobinson は父の<Reason>を<否定>(de-)し、イギリスを脱出したのであった。この時支配的だったのが<Irrationality>であった。今その関係性が逆転したのである。<Reason>は<that Reason which ought to guide>とされ、<Irrationality>は<破滅>へと人を導びく、と考えられた。だが、Robinsonは<de->の作用に身をゆだねたのである。しかし、今、彼は<con->の作用に身をゆだねている。そのように読める。しかし、そうか。この場合も、例によって、Robinson が<de->へと身をゆだねるための準備としての<con->への呼び戻しである。このテキストにも、<con->が与える精神的苦痛が述べられており、<de->することの必要性が暗示されている。<Despondency>も、<de->と見ることは正しくなく、<de->を含むが、むしろ<con->の状況を示している。<spondere>の意味する<promise>とは、<現在>から<離れた>(de-)<未来>のことがらであり、この<de->性を<否定>しているのである。したがって、<Reason>とは、イギリスの社会

では<con->として働いたが、この島ではむしろ<de->として作用しているのである。<de->とは<生>のことだからである。<de->がやはり優位であることは、Robinsonがつくる一つの状況の両義的読みのリストに見てとれる。一つの読みへの<con->の<拒否>を示しているからである。そして、この<de->の<思考>の中で、<God>が現われてくるわけである。この表はきわめて図式的であるが、それだけはっきりとその経過が示されている。

Evil.

*I am cast uron a horrible
desolate Island, void of all
hope of Recovery.*

*I am singl'd out and separ-
ated, as it were, from all the
World to be miserable.*

.....

*I have no Soul to speak to,
or relieve me.*

Good.

*But I am alive, and not drown'd
as all my Ship's Company was.*

*But I am singl'd out too from
all the Ship's Crew to be spar'd
from Death; and he that mirac-
ulously sav'd me from Death, can
deliver me from this Condition.*

.....

*But Cod wonderfully sent the
Ship in near enough to the Shore,
that I have gotten out so many
necessary things as will either
supply my Wants, or enable me
to supply my self even as long
as I live. (66)*

<Evil>と<Good>が対比され、<God>は当然<Good>の項に現われてくる。<he that miraculously sav'd me from Death>が<God>と最後には明示化されている。<Reason>の優越、<God>の信仰の芽生えがあるからといって、<Positive>な見方が<Negative>に勝利するわけではない。大きい流れとして、<de->のリズムに身をゆだねるRobinsonはその中で<con->と<de->の対立の反復を繰り返すからである。大きい流れとしての<de->を今<DE->とし、小さい方のリズムを<de->としておけば、

<DE->の中の<con->も、実は<de->であることがわかる。<de->だけであれば、それは<con->のこととなるからである。またこの<DE->でさえ、<CON->の契機をたえずはらんでいる。Robinsonは<孤島>で生活(<DE->)を進めるうちに、彼自身の<王国>の<建設>(CON-struction)を同時に行なっているからである。

Robinsonは生活を継続するうちに<God>への信仰を<固め>(con-)ていく。しかし、その過程の中で<God>の概念はたえず<ずれ>を生じていく。つまり、不断の<de->があり、かつ<con->へと向っているわけである。明らかに、彼の発見する<God>は<社会>において課された、制度的に<固まった>(con-)<God>ではない。<God>自身が<de->している。<con->の<God>とはRobinsonにとって<貨幣>同様価値がないのである。Robinsonは<God>の存在化の文明的過程も反復しているのである。<社会>では不可能であった<God>の起源へ、彼は回帰しえたといえよう。当然のことながら、この<God>は、テキストにも次のようにあるとおおり、<the Roman Catholick Religion>の<God>ではない——<I began to regret my having profess'd my self a Papist, and thought it might not be the best Religion to die with>(287)、<as I had entertain'd some Doubts about the Roman Religion, even while I was abroad, especially in my State of Solitude>(303)。では、Robinsonの<God>発見のプロセスをテキストに沿って眺めてみよう。

I had alas! no divine Knowledge; what I had received by the good Instruction of my Father was then worn out by an uninterrupted Series, for 8 Years, of Seafaring Wickedness, and a constant Conversation with nothing but such as were like my self, wicked and prophane to the last Degree: I do not remember that I had in all that Time one Thought that so much as tended either looking upwards toward God, or inwards towards a Reflection upon my own Ways: But a certain Stupidity of Soul, without Desire of Good, or Conscience of Evil, had entirely overwhelm'd me, and I was all that the most hardned, unthinking, wicked Creature among our common Sailors, can be supposed to be, not having the least Sense, either of the Fear of God in Danger, or of Thankful-

ness to God in Deliverances. (88)

Robinson は一人救済された時も、<God>の概念はなかったといってよい。その時、<a Kind of Extasie><some Transports of Soul>で心が充ちているだけで、<>true Thankfulness>には至っていない。しかし、大波の<baptism>により、<the most hardned, unthinking, wicked>なるものが浄化され、<God>の概念が芽生える余地が出きたといえよう。だから<麦の発芽>に<奇跡>を感じる事ができた——<I began to suggest, that God had miraculously caus'd this Grain to grow without any Help of Seed sown, and that it was so directed purely for my Sustenance, on that wild miserable Place.>(78) しかし、この畏敬の念も、発芽が鶏の餌の袋を開けた時にこぼれたものによることを知ると消えていく。更に、地震が起ると——<All this while I had not the least serious religious Thought, nothing but the common, *Lord ha' Mercy upon me* ; and when it was over, that went away too.>(81) こうした<神>の概念の<現象> (de-) と<消滅> (con) の連鎖の中で、Robinson は<病気> <死>(con-) に出会い、<God>の概念が定着していく。

These Reflections oppress'd me for the second or third Day of my Distemper, and in the Violence, as well of the Fever, as of the dreadful Reproaches of my Conscience, extorted some Words from me, like praying to God, tho' I cannot say they were either a Prayer attended with Desires or with Hopes; it was rather the Voice of meer Fright and Distress; my Thoughts were confus'd, the Convictions great upon my Mind, and the Horror of dying in such a miserable Condition rais'd Vapours into my Head with the meer Apprehensions; and in these Hurries of my Soul, I know not what my Tongue might express: but it was rather Exclamation, such as, Lord! what a miserable Creature am I? If I should be sick, I shall certainly die for Want of Help, and what will become of me! Then the Tears burst out of my Eyes, and I could say no more for a good while.

.....

I cry'd out, *Lord be my Help, for I am in great Distress.*

This was the first Prayer, if I may call it so, that I had made for many Years: But I return to my Journal. (90-1)

これが Robinson の中に <God> が定着する契機となる。テキストは Robinson が彼の内的必然性に基づいて、<God> を生成したように読ませる。しかし、Robinson にとって、彼を <Distress> から <救済> してくれる存在は <God> でなければならない必然性はあるのか。この点においても、<西洋キリスト教文明> の <痕跡> が Robinson には深く刻まれていたのである。<the good Instruction of my Father> が、<麦> のように内在化していたのである。したがって、ゼロ度の宗教心から Robinson は出発したのではなく、<原初的キリスト教> から出発といえる。たとえば、次の問を發することはゼロ度の出発を暗示するように思える。

What is this Earth and Sea of which I have seen much, whence is it produc'd, and what am I, and all the other Creatures, wild and tame, humane and brutal, whence are we? (92)

ところが、Robinson の思考の論理がいかなるものかは、次の解を得るテキストで明らかになる。

Sure we are all made by some secret Power, who form'd the Earth and Sea, the Air and Sky; and who is that?

Then it follow'd most naturally, It is God that has made it all: (92)

この論理は、『創世記』の天地創造の論理の道筋を逆に辿るものであり、Robinson の思考論理は、<聖書> 的知の論理に支配されているのである。かくして、Robinson の <God> 意識は定着し、<the Will of God> に身をゆだねる気持にまで至る。このように、完全な <God> の確立は、<God> を前提とする <God> の神学の展開をもたらす。更に、Friday が息子として存在するや、宗教教育を施すに至る。この教育がピューリタンのものであることはいうまでもない。

That as the bare reading the Scripture made me capable of understanding enough of my Duty, to carry me directly on to the great Work of sincere Repentance for my Sins, and laying hold of a Saviour for Life and Salvation, to a stated Reformation in Practice, and Obedience to all God's Commands, and this without any Teacher or Instructor;...

As to all the Disputes, Wranglings, Strife and Contention, which has happen'd in the World about Religion, whether Niceties in Doctorines, or Schemes of Church Government, they were all perfectly useless to us; (221)

Robinson の島でのキリスト教史の反復は、カトリック的キリスト教の否定 (de-) の上に成立したピューリタンのキリスト教ではない点で、ピューリタンにとっての信仰の理想が反復されていると読まなくてはならない。この意味で、Robinson は <no-man's land> に漂着したのではなく、<no-church's land> に漂着したのである。

*

もし、文明化された人間がその文明をその起源から反復し直してみたいという欲望にかられたらどうするのであろうか。彼は既に文明という<流れ>のただ中に投企され、そこに固定されている。一つの方法として、<知>のレベルでいえば歴史学的テキストがその欲望を代償的に満たしてくれる。歴大なテキストの海に身を沈めることになる。しかし、<体験>のレベルでの反復、つまり、自己の存在をかけて反復しようと企てるなら、やはり *Robinson Crusoe* のように偶然孤島に流れ着くのがよい。この意味で *Robinson Crusoe* の物語テキストは、文明の原初からの反復の模倣である。それは、既に述べたように、Robinson は文明度ゼロの状態から開始したのではないから。Robinson の England の<離脱>(de-) は、この限りなくゼロ度に近い状況への<下降>として設定され、その地点から文明化の道を<上昇>していく運動へと連動していく。この<離脱>は SF のタイム・トンネルによるのではなく、<空間>軸に沿っての<ずらし>として実現している。

この<空間>的<ずらし>による<離脱>は、<社会>という<外的世界>から、<自己>という<内的世界>への<離脱>とも読めよう。しかし、そこで

定立されている〈外〉と〈内〉の対立は、*Robinson Crusoe* のテキストでは、反転している。〈内〉なる〈社会〉から〈外〉なる〈自己〉へ、である。〈社会〉の〈内〉から〈外〉へ〈離脱〉することで、〈自己〉に参入するからである。Robinson の〈外〉なる〈自己〉への〈de-〉の運動は、つきつめていくと、〈外〉なる〈社会〉へとつき抜けていく。〈外〉なる〈自己〉が〈内〉なる〈自己〉に反転し、〈社会〉が〈外〉なるものになったからである。これは〈con-〉と〈de-〉の運動のはらむパラドックスである。〈con-〉は〈de-〉の契機をはらみ、〈de-〉は〈con-〉の契機をはらんでいる。こうしたパラドキシカルな運動原理が *Robinson Crusoe* の物語テキストを生成しているといえる。そして、このテキストは物語自体が更に〈de-〉の流れの中にあることを暗示し、〈Finis〉の記号を配している——〈All these things, with some very surprizing Incidents in some new Adventures of my own, for ten Years more, I may perhaps give a farther Account of hereafter. FINIS〉 (306).

注

- 1) 'Defoe,' in *The Common Reader* (1925), p.125. (Daniel Defoe, *Robinson Crusoe* (London: Oxford; 1972) に付された序文の中からの引用である)。
- 2) Michael Stapleton, *The Cambridge Guide to English Literature* (Cambridge University Press; 1983) pp.226-7.
- 3) J. B. Sykes(ed.), *The Concise Oxford Dictionary of Current English* (Oxford University Press; 1976)
- 4) Ibid.
- 5) *Webster's Biographical Dictionary* (Massachusetts; G.&C. Merriam Company; 1943, 1976)
- 6) *The New English Bible* (Oxford University Press; 1970) pp.1077-8.
- 7) マルト・ロベール『起源の小説と小説の起源』、岩崎力、西永良成訳 (東京: 河出書房新社; 1975) p. 98.
- 8) Michael Stapleton, *The Cambridge Guide to English Literature*, p.227.
- 9) Ibid., p. 227.
- 10) Ibid., p. 227.
- 11) マルト・ロベール『起源の小説と小説の起源』, p. 98.
- 12) John J. Richetti, *Defoe's Narratives: Situations and Structures* (London: Oxford University Press; 1975) pp. 3-4.

- 13) Daniel Defoe, *Robinson Crusoe*, (ed.) J. Donald Crowley (London: Oxford University Press; 1972) p.3. 以下 *Robinson Crusoe* の引用はこの版に依る。
- 14) アーノルド・ケルト『イギリス小説序説』小池滋他訳(東京:研究社)
- 15) J. C. Cooper, *An Illustrated Encyclopaedia of Traditional Symbols* (London: Thames and Hudson; 1978) p. 140.
- 16) *Ibid.*, p. 140.
- 17) *Ibid.*, p. 188.
- 18) *Ibid.*, p. 36.
- 19) *Ibid.*, p. 36.
- 20) *Ibid.*, p. 14.
- 21) *Ibid.*, p. 14.